

# 自我状態が友だちつき合いに及ぼす影響

## —女子青年を対象として—

The Effects of Ego State on Friendship :  
On Subject of Recent Female Adolescent

菱 田 陽 子  
Yoko HISHIDA

石川県内大学・短期大学生(女性のみ)を対象に、友人関係尺度(岡田1998)と、新版TEGによるエゴグラムの尺度得点をもとに、自我状態から、友だちつき合いへの因果関係の解明を試みた。その結果、NP(養育的な親)と「相手配慮」「関係維持努力」「雰囲気作り」、A(おとな)と「従順なつき合い」、FC(自由な子ども)と「深いつき合い」「雰囲気作り」、AC(順応した子ども)と「深いつき合い」「相手配慮」「従順なつき合い」「関係維持努力」因子が関わりを示した。ACと関わる友だちつき合い因子が最も多いことから女子青年の友だちつき合いはACのエネルギーを使って友だちつき合いを成立させている場面が多いことが示唆された。しかし、FCのエネルギーを使って深いつき合いをし、楽しい雰囲気を作って友だちつき合いを成立させていることも示され、女子青年の友だちつき合いは、相手の世界に踏み込まないように気をつかいながら自己の世界を形成しているばかりではなく、お互いに自己開示し合い、喜びのある深い心の交流を実現していることが示唆された。

### はじめに

女子青年の友だちつき合いと自我状態の関係については、先の研究(金子・菱田 2005)で、友人関係尺度(岡田 1998)、自己受容尺度(沢崎 1993、菱田 2004)を用いて、因子分析によりその因子構造を確認し、友だちつき合いと、自己受容及び自我状態との相関関係を明らかにすることを試みた。その結果、女子青年の友だち関係の側面として、他者への配慮や親密なつき合いと思えるものが見出された。自我状態との関連では、相手配慮や親密な関係について、かなり精神的に無理をしている側面が推測された。「親密なつき合い」因子とFCはマイナスの相関を示し、女子青年の友だちつき合いは、本音でつき合う深さに達していないのではないかと考えた。「従順なつき合い(自己抑制)」因子とACもマイナスの関係を示し、自己抑制の程度はそんなに深刻ではないのかもしれないと推測した。「相手配慮」因子とNPも、「雰囲気作り」因子とFCもマイナスに関わり、予測した結果と異なるものであった。

本研究では、女子青年の友だちつき合いと自我状態との関わりを、共分散構造分析により再検討した。友だちつき合いについては、先の研究とほぼ同じ因子を想定し、分析している。

## 菱 田 陽 子

友だちつき合いについては多くの先行研究がなされているが、岡田(2002)は、大学生の友人関係の特徴として、「群れ関係」「気遣い関係」「関係回避」の3つを挙げている。また、現代青年の友人関係と適応の関連について、軽躁的關係をとる者は、適応感が高く健康的にみえるが、現実自己と理想自己の差があり、自己不一致の傾向があると述べている。更に、軽躁的關係をとらない者のほうが、親友像と理想自己像を共通の枠組みとしている傾向がある、としている。

本研究が対象としている女子青年についてもこのような傾向のあることを予測するとともに、具体的には、本研究では、金子・菱田(2005)で分析している、女子青年の友だちつき合いの5つの側面(親密なつきあい、自己抑制(従順なつきあい)、相手配慮(相手へのやさしさ)、雰囲気づくり、関係維持配慮)から、再検討したい。

これまで筆者は現代青年の自己受容について調べてきたが(菱田2004、2006a、2006b)、友だちつき合いにおいても、安定した自己の受け容れは、相応に影響があると考えている。金子・菱田(2005)では、女子青年の友だち関係と自己受容について、親密なつき合いが自分に対する優しさ、愛しさ、社会性受容等自己受容全体と関わること、相手への優しさを含む相手配慮的つき合いが、優しさ・真面目さの受容、精神的自己受容と関わること、関係維持配慮や雰囲気作りを大切にする友だちつき合いが安定性受容、自分尊重に関わることを明らかにした。この結果から、それぞれの友だちつき合いの各因子が、自己受容の各側面と関わり、ありのままの自己の受容をしていることが窺えた。更に相関関係から、友だちつき合いと自己受容の相互の関わりのあることを示した。

近年、いじめの問題が多く報道され、様々な角度から、辛い立場にいる子ども達を救おうとする動きがあるが、本研究で対象としている19歳前後の女子青年の中にもいじめを経験したことがある者の存在が予測される。これらのマイナスの側面を含み、友だちつき合いはその影響が単純ではないことも推測されるが、現代青年の特徴のひとつが、軽躁的友だち関係であるとしても、他方では、喜びのある深い心の交流を求め、実現していることも予測される。

人は一人では生きることができない。岡田(1999)がいう、女子青年の群れ傾向にもそのことが窺え、群れる心理には、群れる楽しさもあると共に、群れから外れることの不安もあるのではないかと思われる。その不安は友だちつき合いにおける真の親密性である、深いつき合いによって解決されるのではないだろうか。筆者は、女子青年が友だちつき合いに望む根幹は真の親友を得、深いつき合いの喜びと充実を知ることにあると考えている。

岡田(2005)は、現代青年は、相手の世界に踏み込まないよう気をつかいながら、自己の世界を形成している可能性を示唆しているが、女子青年は、この傾向と共に、お互いに自己開示し合い、深いところまで踏み込み、踏み込まれる関係を求め、その関係に安心と喜びを覚えることも推測される。

本研究では、女子青年の自我状態が友だちつき合いにどのように関わっているかについて調べ、その結果から、友だちつき合いと心の状態の全体的傾向を捉えたい。

## 目 的

本研究では、女子青年の自我状態が友だちつき合いにどのように関わっているかを明らかにす

ることにより、友だちつき合いと心の状態の全体的傾向を捉えることを目的とする。

具体的目的は、下記のとおりである。

- (1) ここで考えられたいくつかの友だちつき合い因子が、いかなる自我状態とどのように関連するかを解明する。
- (2) 異種の友だち関係相互にも関連が認められる可能性があるので、ここで考える友だちつき合いすべてを扱う分析を試みることによって、全体としてまとまった姿(構造)を明らかにしたい。

## 方 法

調査対象：石川県内大学・短期大学生 127 人(女性のみ)、平均年齢 18.5 歳(殆どは 18 歳及び 19 歳)。調査は一部複数回に分けて回答を求めたこともあり、記入漏れもあったため、項目により有効回答数に相違がある。

調査期間：2006 年 2～7 月

調査用紙：実際に得られたデータ(回答)のうち、ここで分析の対象となったものは次の通りである。①友だちつき合い尺度として、岡田(1998)による 50 項目、②自我状態を分析する尺度として「新版 TEG」(東京大学医学部心療内科 TEG 研究会 2002) 55 項目、以下これらをそれぞれ、友だちつき合いに関する「友人関係尺度」、及び「エゴグラム」と呼ぶことにする。

調査手続き：各大学の講義室において、質問紙を配布し、回答されたものをその場で回収した。

## 結果と考察

友人関係尺度の 50 項目とエゴグラムの尺度得点をもとに、自我状態から友だちつき合いへの因果関係を解明すること、即ち、各自我状態(観測変数)を独立変数とし、各友だちつき合い因子(潜在変数)を従属変数として予測するために以下の分析を行った。

以下の図において、長方形は顕在変数(観測変数)を示し、楕円は潜在変数を示している。相関係数及びパス係数は有意水準 10% で検討をし、適合度は、CFI 及び RMSEA によって判断した。以下の分析は SPSS 社の Amos 7.0 によったものであり、各パス図の下方に適合度を判断するための  $\chi^2$  値、自由度、 $\chi^2$  の p 値、CFI、RMSEA の値をそれぞれ示している。

### 1. 各友だちつき合い因子とエゴグラム(自我状態)の因果関係

友人関係尺度(岡田 1998)により、友だちつき合い因子 5 因子「深いつき合い」、「相手配慮(相手へのやさしさ)」、「従順なつき合い(自己抑制)」、「関係維持努力(一生懸命なつき合い)」、「雰囲気作り」を仮定して、以下の分析を試みた。

5 つの自我状態は、Dusay (1977) による解釈を基本とする。即ち、CP(批判的な親)は「相手を批判したり、欠点を見つけたりするパーソナリティの部分」であり、NP(養育的な親)は「成長するように養育したり、養育を促す部分」であり、A(おとな)は「論理的で正確なものの代名詞」であり、FC(自由な子ども)は「喜びと軽薄さの代名詞」であり、AC(順応した子ども)は「順応したり、妥協したりする」。

個々の友だちつき合い因子とエゴグラム(自我状態)の分析にあたり、まず、全ての友だちつき合い因子と友だちつき合いに関連すると推測される4つの自我状態(NP, A, FC, AC)相互間の相関係数を求めた(Table 1)。ここで、自我状態と、以下の分析で扱うのと同じ友だちつき合いを示す潜在変数、これらすべての変数相互間の相関係数を、Amosによって計算している。また、以下の分析においても確認されているように、相手に対する批判や欠点をみつける自我状態CPについては、社会的なつき合いではなく、主体的に親密さを望む友だちつき合いには関連しないと考えられるため、計算していない。

Table 1 友だちつき合いと自我状態の相関行列

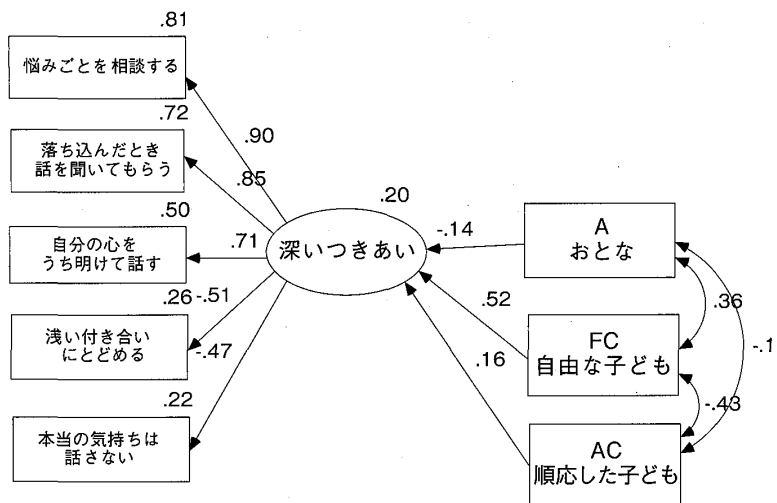
	深いつきあい	相手配慮	従順なつき合い	関係維持	雰囲気づくり	NP	A	FC
深いつきあい	.058							
相手配慮	.106	.335 **						
従順なつき合い	.173	.370 **	.653 ***					
関係維持	.192 +	-.081	-.019	.059				
雰囲気づくり	.138	.548 ***	-.037	.199 +	-.009			
NP	.013	.065	.103	-.100	.280 **	.134		
A	.381 ***	-.034	-.069	-.035	.621 ***	.212 *	.362 ***	
FC	-.013	.326 **	.455 ***	.434 ***	-.256 *	.077	-.181 +	-.436 ***

\*\*\* p<.001, \*\* p<.01, \* p<.05, + p<.10

(1)「深いつき合い」因子と自我状態について

Figure 1は、「深いつき合い」因子とそれに関わる項目及び自我状態との因果関係モデルを示したものであり、この「深いつき合い」に「自由な子ども(FC)」が有意に関与していると推測されるパス図を示している( $\chi^2 = 42.955$ , (df=17, p<.001), CFI =.915及びRMSEA=.110)。

パス図の適合度CFIは高いが、RMSEAによる適合度は悪い。FCと「深いつき合い」因子のパス係数の絶対値は相応に大きく有意であるが、A, ACとはパス係数も小さく有意ではない。ただし、この2つの自我状態を除いて分析すると適合度は更に悪くなる。「深いつき合い」にFCの自我状態のみが関わっているとは考えにくいこともあり、分析上明らかな



Chi2 = 42.955(df = 17, p = .000)  
CFI = .915, rmsea = .110

Figure 1 深いつき合いと自我状態

Table 2 深いつき合いと自我状態

	推定値	確率
A	-.144	.143
FC	.519	***
AC	.158	.119

\*\*\* p<.001

関係は示さないものの、「深いつき合い」に、A や AC の自我状態も何らかの形で関与していることが推測される。

ただし、A 及び AC との関係は、ここで取り上げた独立変数相互の相関もあるが (Table 1)、A 及び AC は「深いつき合い」と関連するとは考えられない。ただ、A 及び AC との関連を含めて (A はプラスに AC はマイナスに関連しつつ) FC が深いつき合いをもたらしていると思われる。

この結果からは、本音でつき合う「深いつき合い」には、「親の影響をまったく受けていない、生まれながらの部分である。ホメオスターシスの原理に基づいた自然随順の営みで、快感を求めて天真爛漫に振る舞う。直観的な感覚や創造性の源で、豊かな表現力は周囲に温かさ、明るさをあたえる」(末松 1989)」という特徴をもつ FC のパス係数が .52 ととても大きい。友だちつき合いにおける「深いつき合い」は、FC のエネルギーを中心として使い、他の自我状態は小さい関わりがあるとしても殆ど関係しないことが明らかとなった。この結果から、女子青年の本音の友だちつき合いが、楽しく、豊かな心のやりとりであることが推測される。先の研究 (菱田 2006b) で、FC のエネルギーが自己受容を支える根幹であることが明らかになったが、本音でつきあう、「深いつき合い」が、女子青年にとって負担ではなく、自己受容を支えるエネルギーと同じ FC によってなりたっていることは、重要な意味をもつと考える。友だちつき合いは、心の交流とその成長によって、成熟した交流に育つと考えられることから、対象を変えてもこの結果が得られるか確認を重ねたい。

悩みごとを相談したり、落ちこんだとき話をきいてもらったり、自分の心をうち明けて話すことができたりする「深いつき合い」に、「他人を労る、親身になって世話をする、親切、寛容、他人の喜びを自分のことのように喜ぶ、人の気持ちがよくわかり、共感的」(東京大学医学部心療内科 TEG 研究会 2002) な NP のエネルギーの関与があることも予想したが、その関与は全くみられない。NP は押しつけがましい側面を持つ自我状態であり、余計なお世話をする要素ももつため、面倒をみる場面では適しているエネルギーであるとしても、対等に深い心のやりとりをする女子青年のつき合いには、適当なエネルギーではないことが推測される。

## (2) 「相手配慮 (相手へのやさしさ)」因子と自我状態について

Figure 2 は、「相手配慮 (相手へのやさしさ)」因子とそれに関わる項目及び自我状態との因果関係モデルを示したものであり、NP (養育的な親)、AC (順応した子ども) が有意に関与していると推測される、ほぼ適合したパス図を示している ( $\chi^2 = 21.978$  (df=14, p=.079)、CFI =.957 及び RMSEA=.067)。

相手に優しくするよう心がけたり、相手に自分の意見を押しつけないように気をつけたり、友だちを傷つけないようにしたり、相手の気持ちに気をつかったり、友だちの話が退屈でもがまんして聞く、やさしさと相手配慮のある友だちつき合いには、相手の立場にたつて親身に世話をする NP が大きく関わり、複雑性のある、反抗を含んだ従順性を示す AC の関与も少し見られる。自分に対するというより、相手に対する、優しさ、配慮を特徴とする NP のエネルギーが、相手配慮の友だちつき合いに大きく使われることは、非常に理解しやすい。

NP と AC には相関が無いことから、「相手配慮」に使われる自我状態は複雑ではなく、分かり

易い形を示している。先の研究(菱田 2006b)で述べたが、心のエネルギーが単純に蓄積される自我状態はFCであり、FCを使えば使うほど楽しく、喜びのあふれる心の状態になると思われ、他の自我状態はAによってコントロールしながら使わなければ、エネルギーの低い消耗した心の状態になると考えられる。このことから、「相手配慮」の友だちつき合いには、Aの関与が望まれると考えているが、女子青年の「相手配慮」の友だちつき合いにAの関与が全くみられない。FCの低い状態の時に、「相手配慮」のつき合い方をする場合には、疲れやいろいろなストレスをためることも推測される。相手への優しさも含む「相手配慮」は、女子青年の友だちつき合い、人間関係で起こる問題にもつながっているのではないと思われ、これらを理性的に解決する、理性的な自我状態Aを育てることが必要であると思われる。

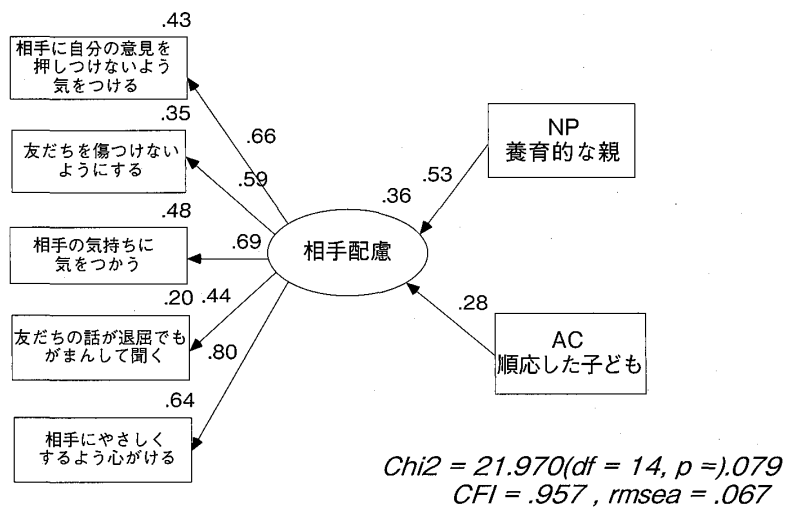


Figure 2 相手配慮 (相手へのやさしさ) と自我状態

Table 3 相手配慮 (相手へのやさしさ) と自我状態

	推定値	確率
NP	.533	***
AC	.281	**

\*\*\* p<.001, \*\* p<.01

(3) 「従順なつき合い (自己抑制)」因子と自我状態について

Figure 3は、「従順なつき合い (自己抑制)」因子とそれに関わる項目及び自我状態との因果関係モデルを示したものであり、「おとな (A)」、「順応した子ども (AC)」が有意に関与していると推測される、適合度の高いパス図を示している ( $\chi^2 = 14.515$  (df=13, p=.339)、CFI =.986 及び RMSEA=.030)。

友だちからどう見られているか気にしたり、友だちから傷つけられないようにふるまったり、仲間の前で恥をかかないように気をつけたり、必要に応じて友だちを頼りしたり、相手の気持ちを聞きだそうとしたりする、自己抑制の効いた、従順なつき合いには、反抗と従順という複雑な自我状態ACのエネルギーを大きく使っている。このことから、自分を押しさえ、相手に従っている表面上は素直さを相手に感じさせると思われる友だちつき合いは、単純な心の構造であるとは考えにくい。但し、高くはないが、論理的で正確性を特徴とするAの有意な関与がみられることは、AでACのエネルギーを調整していることも推測される。「理性的」で「合理性」を尊び、「沈着冷静」で、「事実に従って客観的に判断する」自我状態Aは、感情や行動のコントロールに使われるエネルギーでもあると考えている。Aが働き過ぎると感情が押しさえられ冷たい感じを他に与えると言われているが、「従順なつき合い (自己抑制)」とは、パス係数が小さいことからAの働きはそ

自我状態が友だちつき合いに及ぼす影響

んなに大きくはないと思われる。Aによって、「必要に応じて友だちを頼りにする」必要性の度合いを調整したり、「仲間の中で恥をかかないように」、「友だちからどう見られているか」気にしつつ、自分を客観的にみたりしているのであろう。

更に、「従順なつき合い」に使われるエネルギーが反抗心を含むACと合理的で冷静な冷たさのあるAであることから、感情の喜びのある、深い心のつき合いの要素は持たないつき合い方であると思われる。場面や状況、社会性との関わりでは、必要とされるつき合い方とも考えられる。

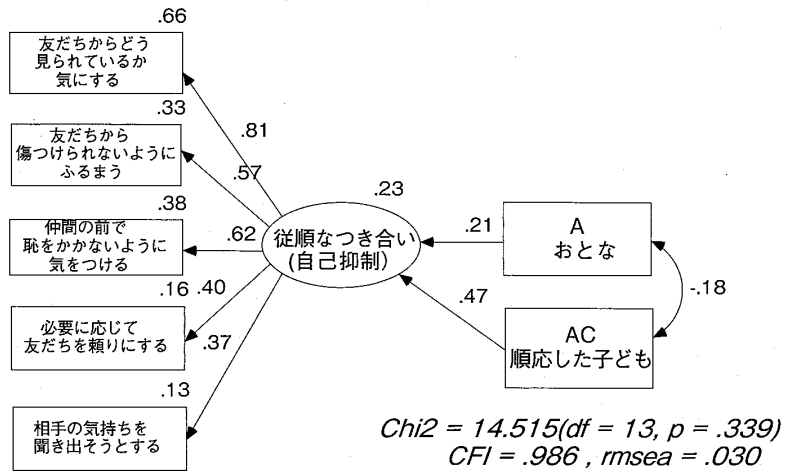


Figure 3 従順なつき合い (自己抑制) と自我状態

Table 4 従順なつき合い (自己抑制) と自我状態

	推定値	確率
A	.211	*
AC	.471	***

\*\*\* p<.001, \* p<.05

(4) 「関係維持努力 (一生懸命なつき合い)」因子と自我状態について

Figure 4は、「関係維持努力 (一生懸命なつき合い)」因子とそれに関わる項目及び自我状態との因果関係モデルを示したものであり、「順応した子ども (AC)」が有意に関与していると推測される、ほぼ適合しているパス図を示している ( $\chi^2 = 35.812$  (df=18, p=.007)、CFI = .875 及び RMSEA=.089)。NP, FC と「関係維持努力」因子は有意ではないが、これら2つの自我状態を除いて計算すると、適合度は下がり、適合しない。一生懸命なつき合い方を示す「関係維持努力」に

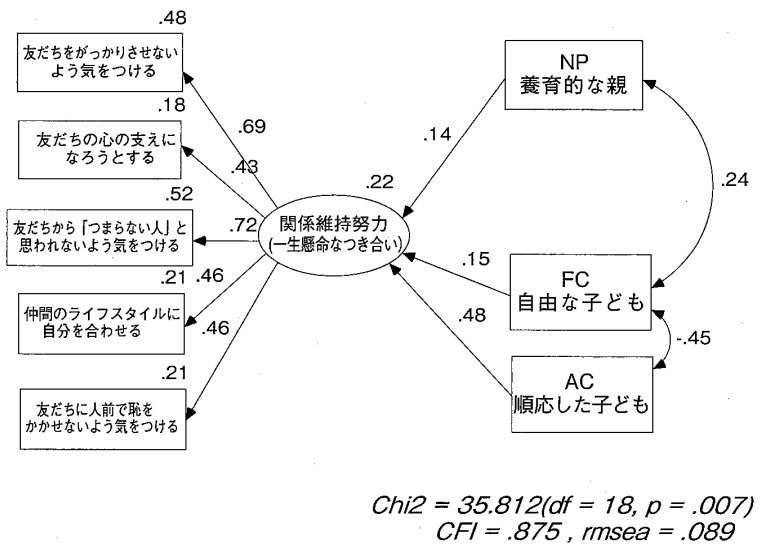


Figure 4 関係維持努力 (一生懸命なつきあい) と自我状態

Table 5 関係維持努力 (一生懸命なつきあい) と自我状態

	推定値	確率
NP	.143	.180
FC	.154	.198
AC	.479	***

\*\*\* p<.001

ACのみの自我状態が関わることは考えにくいことから、ACのエネルギーを中心に、NP, FCも、

分析の結果としては表れないものの、「関係維持努力」に関与していると推測される。

ただし、NP 及び FC との関係は、ここで取り上げた独立変数相互の相関もあるが (Table 1)、NP 及び FC は「関係維持努力」因子と関連するとは考えられない。ただ、NP 及び FC との関連を含めて (NP 及び FC 共にプラスに関連しつつ) AC が「関係維持努力」をもたらしていると思われる。

友だちをがっかりさせないように気をつけたり、友だちの心の支えになろうとしたり、友だちからつまらない人と思われないように気をつけたり、仲間のライフスタイルに自分を合わせ、友だちに人前で恥をかかせないように気をつける、一生懸命に関係性を維持しようとする友だちつき合いには、協調性に富み、妥協性が強く、従順であり、遠慮がちで依存心が強く、我慢してしまったり、反抗や敵意を隠している AC のエネルギーを使っている。一生懸命努力をして、相手に気をつかいながら、関係を壊さないようにする側面に対して、AC のエネルギーが使われていることは、親密な関係に至らない初期の段階の友だちつき合いであることも推測され、この関わりが長く続く友だち関係は、壊れやすさを含んでいると共に、疲れる関係なのではないだろうか。気遣われている方は、心地よいことも推測され、相手の気遣いに気付かない限り、バランスの悪いつき合い方と思われる。

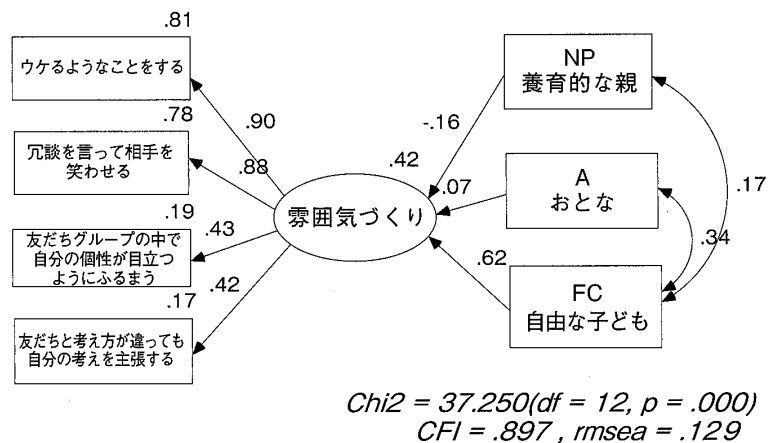
(5) 「雰囲気づくり」因子と自我状態について

Figure 5 は、「雰囲気づくり」因子とそれに関わる項目及び自我状態との因果関係モデルを示したものであり、「自由な子ども (FC)」、「養育的な親 (NP)」が有意に関与していると推測されるパス図を示している ( $\chi^2 = 37.250$  (df=12、 $p < .001$ )、CFI = .897 及び RMSEA=.129)。

パス図の適合度 CFI は高いが、RMSEA の適合度は悪い。FC と「雰囲気づくり」因子のパス係数は相応に大きく、NP とはパス係数は小さいが有意である。一方、A とはパス係数も小さく有意ではない。

ただし、A を除いて分析すると適合度は更に悪くなる。分析上明らかな関係は示されないものの、「雰囲気づくり」に、A の自我状態が何らかの形で関与していることも推測される。

ただし、A 及び FC との関係は、ここで取り上げた独立変数相互の相関もあるが (Table 1)、A は「雰囲気づくり」因子とは関連するとは考えられない。ただ、A との関連を含めて (プラス



Chi2 = 37.250(df = 12, p = .000)  
CFI = .897, rmsea = .129

Figure 5 雰囲気作りと自我状態

Table 6 雰囲気作りと自我状態

	推定値	確率
NP	-.160	*
A	.074	.385
FC	.623	***

\*\*\* p<.001, \* p<.05



に関連しつつ) FC はプラスに、NP がマイナスに働いて「雰囲気づくり」をもたらしていると思われる。

ウケるようなことをしたり、冗談を言って相手を笑わせたり、友だちグループの中で自分の個性が目立つようにふるまったり、友だちと考え方が違って自分の考えを主張したりする友だちつき合いは、その場の雰囲気を盛り上げ、目立つようにふるまって、自分自身も楽しんでいるつき合い方であることが示されている。

友だちと楽しく過ごそうとする「雰囲気づくり」因子と FC の関わりが大きいことは、女子青年は、楽しさを装っているのではなく、心から楽しい雰囲気を作ることを楽しみ、その雰囲気の中で楽しい友だち関係を築いていると考えられ、このつき合い方をすればするほど、心は元気になると思われる。

NP と、パス係数は小さいが有意なマイナスの関わりを示していることは、楽しく騒ぐ友だちつき合いには、母親的な相手に対する優しさのエネルギーは必要ではなく、NP のエネルギーをつかえばつかう程、楽しい雰囲気を阻害することが推測される。19 歳前後の女子青年が喜びと軽薄さももつ FC のエネルギーを使って、心から楽しめる友だち関係を築いていることは重要な意味をもつと考えている。「雰囲気作り」には馬鹿騒ぎのような要素も推測されるが、楽しい感情があれば、心のエネルギーは蓄積されると思われる。

表面上の友だちつき合いや、装っている友だちつき合いが必要な場面もあるであろうが、そのようなつき合いからは、心のエネルギーを溜めることは難しいと推測される。「雰囲気作り」因子は、ストレス解消のつき合いの場であることも予測され、FC と大きく関わっていることに、女子青年の友だちつき合いの健康さが示されていると考えられる。

## 2. 友だちつき合い全因子と自我状態の因果関係

以上、友だちつき合い各因子と自我状態との関係をみたが、次にこれら友だちつき合い因子全てと自我状態との関連を明らかにするための分析を試みた。

この結果は、基本的には、以上の個別の分析と傾向は極めて類似しており、これまでの傾向を確認することとなった。ただ相違も認められるので、これらの相違を中心に考察してみたい。

Figure 6 は、友だちつき合い全因子とそれに関わる項目及び自我状態との因果関係モデルを示したものであり、CP 以外の自我状態と有意に関与していると推測されるパス図を示している ( $\chi^2 = 630.382$  (df=340,  $p < .001$ ), CFI = .750 及び RMSEA = .082)。

友だちつき合いの各因子相関 (Table 1) をみると、「深いつき合い」因子と「雰囲気作り」因子、「相手配慮」因子と「従順なつき合い」因子及び「関係維持努力」因子、「従順なつき合い」因子と「関係維持努力」因子がそれぞれ有意な相関を示している。全友だちつき合いと全自我状態 (Table 7) の関係 (パス係数) をみると、これら相関のある友だちつき合い因子には、当然そのことは予想されるが、共通の自我状態のエネルギーが使われており、似通った性質を持つ友だちつき合い因子であることが推測される。

個別の友だちつき合い因子と自我状態との分析では、パス係数が小さく有意ではない自我状態も加味して、それぞれの友だちつき合い因子を成立させているであろうと推測したが、全友だち

つき合い因子と自我状態のほぼ適合したパス図 (Figure 6) は全て有意な関わりを示しており、パス係数が小さく有意ではない自我状態の関わりは認められなかった。その理由としては、全友だちつき合い因子と全自我状態のパス図は、友だちつき合い因子同士の相関も含んだ因果関係を分析しているためであろう。

先に示した個別の友だちつき合い因子と自我状態の分析結果と、ここでの全友だちつき合い因子と自我状態の分析結果との間で、関係性の違いがみられたものは、「深いつきあい」(個別はFCのみ、全関連はFC, AC)と「関係維持努力」(個別はACのみ、全関連はNP, AC)の2つのみであった。

この他、以下のことが示されている。

NPが使われているのは、「相手配慮(相手への優しさ)」因子、「関係維持努力(一生懸命なつき合い)」因子、「雰囲気作り」因子であり、Aが使われているのは、「従順なつき合い」因子のみ、FCが使われているのは「深いつき合い」因子、「雰囲気作り」因子、ACが使われているのは、「深いつき合い」因子、「相手配慮」因子、「従順なつき合い」因子、「関係維持努力(一生懸命なつき合い)」因子と最も多い。

NPと関わりを示した友だちつき合い因子と、NPの関わり方をみると、「相手配慮(相手へのやさしさ)」因子と最も大きな関わりを示し、NPのエネルギーを使えば使うほど「相手配慮(相手へのやさしさ)」因子の友だち

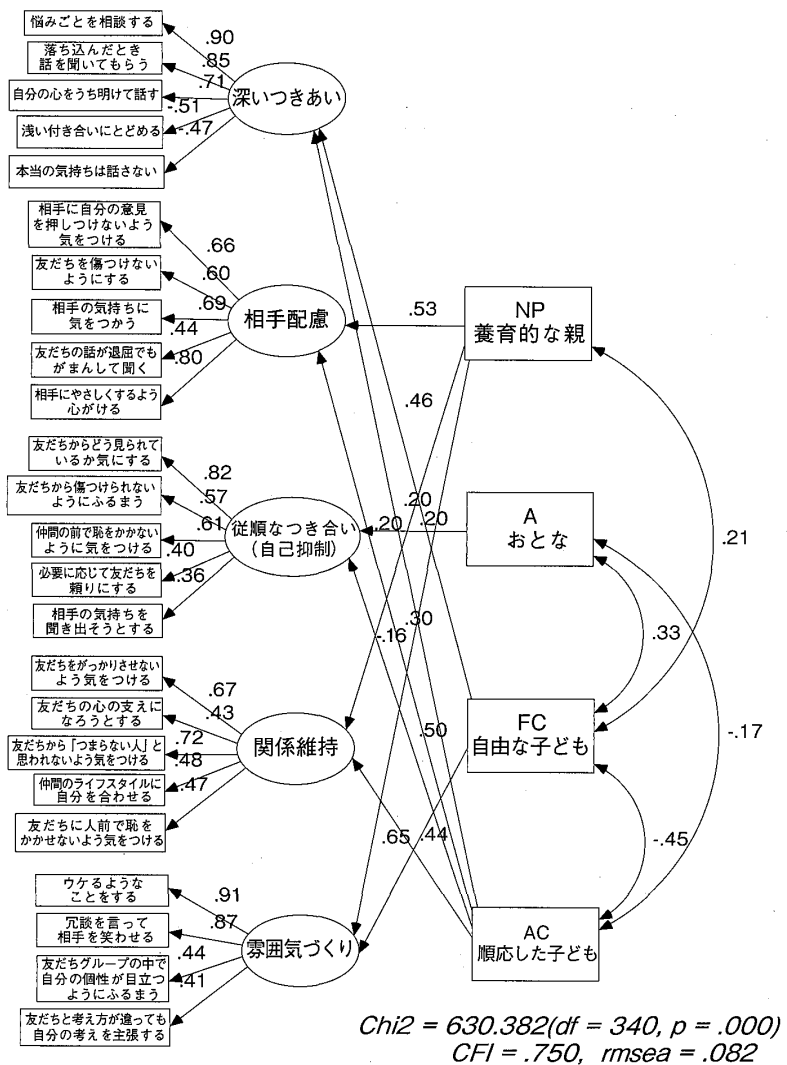


Figure 6 全友だちつき合いと自我状態

Table 7 全友だちつき合いと自我状態

		推定値	確率
NP	相手配慮	.531	***
	関係維持	.198	+
	雰囲気作り	-.159	+
A	従順なつき合い	.205	*
	深いつき合い	.464	***
FC	深いつき合い	.651	***
	雰囲気作り	.651	***
AC	深いつき合い	.199	+
	相手配慮	.297	**
	従順なつき合い	.500	***
	関係維持	.443	***

\*\*\*  $p < .001$ , \*\*  $p < .01$ , \*  $p < .05$ , +  $p < .10$

つき合いが成立する。「関係維持努力(一生懸命なつき合い)」因子、「雰囲気作り」因子とは同程度のパス係数で、さほど大きな関わりは認められず、「関係維持努力(一生懸命なつき合い)」因子とはプラス、「雰囲気作り」因子とはマイナスの関わりを示している。

FCと関わりを示した友だちつき合い因子と、FCの関わり方をみると、「雰囲気作り」因子と大きな関わりを示し、「深いつき合い」因子とも相応に大きな関わりを示している。

ACと関わりを示した友だちつき合い因子と、ACの関わり方をみると、「従順なつき合い」因子、「関係維持努力(一生懸命なつき合い)」因子と大きな関わりを示し、「深いつき合い」因子、「相手配慮(相手への優しさ)」因子とはさほど大きな関わりは示していない。

これら全友だちつき合いと全自我状態との関わりを示すパス係数で、マイナスのものは、NPと「雰囲気作り」因子のみである。「雰囲気作り」に、過度に干渉するNPのエネルギーを使うと雰囲気作りの邪魔になる。他の自我状態は、そのエネルギーを使えば使うほど、その自我状態が関わる友だちつき合いが成立することを示している。

### 全体的検討

以上、女子青年の友だちつき合いと自我状態の関係をみてきた。「深いつき合い」と「雰囲気作り」には喜びのエネルギーFCが関与し、優しさのある「相手配慮」のつき合いには、思いやりと面倒見のエネルギーNPが関与し、自己抑制をしている「従順なつき合い」には、反抗心を含む複雑性のある従順なエネルギーACが関与し、「関係維持」のために努力する一生懸命なつき合いにもACのエネルギーが、大きな関与をみせ、それぞれの友だちつき合いを成立させていることが示された。自我状態はこの他CPとAがあるが、CPは、社会的なつき合いではなく主体的に親密さを望む友だちつき合いには、これまでの分析結果からも推測されるように、関連しないと考え、分析から除いた。Aは、「従順なつき合い(自己抑制)」因子とのみ小さな関わりを示した。Aと「従順なつき合い」の関係性については、個々の友だちつき合いと自我状態の関わりのところでも述べたが、Aのエネルギーで調整されたつき合い方であると推測している。

これらの結果は、個々の友だちつき合い因子の特徴とそれぞれの自我状態の特徴を考え合わせると、相応に意味のある理解しやすい関係性を示している。

更に、友だちつき合いと自我状態を全体でみると、ACのエネルギーが働いて成り立っている友だちつき合い因子が最も多い(Table 7)。このことは現代女子青年の特徴とも考えられる。近年の青年の自我状態は、ACが高く、Aの低い型を示すものが多い。このことは友だちつき合いのみにかかわらず、青年の心のエネルギーはAC主導型が多いことを示している。友だちつき合いに関しても、反抗と従順性の2面性をもつ複雑で、幼稚性のあるACのエネルギーを多く使って、友だちつき合いを成立させている場面の多いことが示されている。

ただし、本研究では、FCのエネルギーを使って「深いつき合い」をし、楽しい雰囲気を作って、友だち関係を成立させている姿も示された。個々の友だちつき合いと自我状態のパス図では、「深いつき合い」因子とACの関わりは見られなかったが、全友だちつき合いと全自我状態のパス図では、低い値ではあるが、関わりが示されている。ACのエネルギーは使えば使うほど、葛藤や疲れのある心の状態になるであろうと考えられるが、深い心のやりとりをする友だちつき合い

が、楽しさばかりのやりとりではないとしても、ACの関与は小さいことから、楽しさを阻害するほどではないことが推測される。

岡田(2002)は、現代青年の友人関係の特徴を「互いの内面を開示することなく、傷つけ合うことがないよう、表面的に円滑な関係を取る」とし、「群れ関係、気遣い関係、関係回避」と述べているが、これらの友だちつき合いには、ACの従順性のエネルギーが多く使われていることも推測され、充実した楽しい友だち関係を築くことができていないようにも思われる。ただし、本研究で、FCと「深いつき合い」及び「雰囲気作り」との関係が示されたことにより、天真爛漫なFCのエネルギーを使えば使うほど、「楽しい雰囲気」及び「深いつき合い」が成立していることが示された。このことにより、岡田(2002)が述べる青年の友人関係の特徴の他に、従来多くの論文で述べられてきた、「内面を開示しあうような内面的友人関係」(岡田 2002)も女子青年の友だちつき合いには存在していると推測される。

女子青年は、友だちと楽しい雰囲気を作り、心から楽しく過ごし、深いつき合いをして充実した楽しさを味わいつつ、心を養い、心を支えていると思われる。先にも述べたように、筆者は、FCのエネルギーは、使えば使うほど心のエネルギーとして充足され、元気で健康な心の状態になると考えていることから(菱田 2006b)、FCと大きく関わりつつ成立している「深いつきあい」と「雰囲気づくり」の友だちつき合いが、心にエネルギーをため、友だちつき合いを支えている根幹であろうと考えている。

この他、本研究で述べてきた、楽しくて天真爛漫なFCのエネルギーによって支えられている「深いつき合い」については、従来述べられてきた内面的友人関係と全く同じ要素を有してはいないとしても開示型の交流であることから、かなり似通っているのではないかと考えている。ただし、青年の心が時代背景や文化背景の影響を受けて変化し、感じ方の変化も予測できることから、友だちつき合いに関わる自我状態の関わり方も変化してきていると推測される。このため、本研究で調べた、FCの関わる「深いつき合い」と従来述べられてきた「伝統的な内面的友人関係」は微妙に異なる様相であることも推測される。言い換えれば、本研究で示された「深いつき合い」は、新しい友だちつき合いの側面であることも考えられる。今後もこの点に注目しつつ、女子青年の「深いつき合い」を明らかにしていきたい。

筆者はこれまで、自我状態の中のFCに注目してきた(菱田 2004等)。FCのエネルギーを使う心の状態は、生まれたままの天真爛漫なエネルギーによって元気を回復した心の状態であると考えている。本研究でもFCが関わる「深いつき合い」、「雰囲気作り」、中でも「深いつき合い」に注目し、このつき合いによって、心のエネルギーは蓄えられ、心の元気が回復されると考えている。岡田(2002)による、「群れる」「気遣う」「関係回避する」青年の友人関係が、現代の青年の心の問題である、いじめ、引きこもり、対人恐怖症、躁鬱病、アパシー、不安神経症、統合失調症等の不安定で不健康な心と関連があるとも思われるが、他方では、本研究により、「深いつき合い」をする友人関係によって健康な心を維持している女子青年の心の状態も推測され、充実したエネルギーに満ちた力強い、女子青年の友だちつき合いの姿も窺われた。

本研究にいたるまで、女子青年の友だちつき合いには表面的な脆さもあるのではないかと推測してきたが、本研究で、力強い友だちつき合いも窺われ、今後もFCのエネルギーによって成立

する「深いつき合い」に注目していきたい。更に、男子との性差も今後の検討課題としたい。

本研究は、先の研究(金子・菱田 2005)と同じ友だちつき合いのしかたを想定して分析したが、「親密なつき合い」はFCとマイナスの関わり、「自己抑制(従順なつき合い)」はA、ACとマイナスの関わり、「相手配慮(相手へのやさしさ)」はNPとマイナスの関わり、「雰囲気づくり」はFCとマイナスの関わり、「関係維持配慮」のみAとわずかなプラスの関わりを示し、本研究とは対照的な結果を示している。このことについては再分析を試みる必要があると考えているが、これを含めて、更なる調査・分析により検討を重ねていき、現代青年の友だちつき合いの様相を探っていきたい。

現代に生きる青年達の心の健康、心の問題に大きく関わると思われる友だちつき合いを明らかにすることによって、心の問題に苦しむ青年達を友だちつき合いの方向から、より理解することができるのではないかと考えている。

## 文 献

- Dusay, John M. *EGOGRAMS: How I See You and You See Me*, Harper & Row, Publishers, Inc. 1977 (池見西次郎 監修 新里里春 訳 『エゴグラム：ひと目でわかる性格の自己診断』 創元社 1980年)
- 菱田陽子 「現代青年の自己受容に関する分析(2)：やさしさを中心とした性差の検討」『北陸学院短期大学紀要』第35号 2004年 p.195-212
- 菱田陽子 「現代青年の自己受容に関する分析的研究(3)：自我状態との関係についての男女比較」『北陸学院短期大学紀要』第37号 2006年a p.155-171
- 菱田陽子 「現代青年の自己受容に関する分析的研究(4)：自我状態との関係について」『北陸学院短期大学紀要』第38号 2006年b p.219-232
- 金子勲榮・菱田陽子 「女子青年の自己受容に関する分析：友だちつき合いを中心とした多角的分析」『金沢大学教育学部紀要(教育科学編)』第54号 2005年 p.71-88
- 岡田努 「現代青年に特有な友人関係の取り方と自己愛傾向の関連について」『立教大学教職研究』9 1999年 p.21-31.
- 岡田努 「友人関係の現代的特徴と適応感及び自己像・友人像の関連についての発達的研究」『金沢大学文学部論集 行動科学・哲学篇』第22号 2002年 p.1-38.
- 岡田努 「現代青年の友人関係・ライフイベントと自己の発達に関する研究」『金沢大学文学部論集 行動科学・哲学篇』第25号 2005年 p.15-32.
- 沢崎達夫 「自己受容に関する研究(1) 新しい自己受容測定尺度の青年期における信頼性と妥当性の検討」『カウンセリング研究』第26号 1993年 p.29-37.
- 末松弘行・和田廸子・野村忍・俵里英子 『エゴグラム・パターン：TEG 東大式エゴグラムによる性格分析』金子書房 1989年
- 東京大学医学部心療内科 TEG 研究会 編 『新版 TEG 解説とエゴグラム・パターン』金子書房 2002年